

キエフの大きな門 (2017年6月23日～7月1日)

プロムナード

少年時代、私はムソルグスキーの「展覧会の絵」が好きで、その中でもトランペットが案内をする「プロムナード」と「キエフの大きな門」が今も印象に残っています。

あれから60年、私は「ベラルーシ・ウクライナ・モルドバ3ヵ国7泊9日周遊」のツアーに参加して「キエフの大きな門」を訪れることになりました。

ウクライナと聞くと、東西世界の境界で危ない所というイメージがありますが、それを肌で感じるのかどうか、早速旅に出かけてみましょう。



エアフロートでミンスクへ

成田からエアフロートでモスクワ経由ベラルーシの首都ミンスク迄飛びます。

エアフロートで約10時間かけてモスクワのシェレメチェボ空港に到着しました。

ロシア製の旅客機かと思っていたけれど Airbus 330-300 で、フライトアテンダントさんも若くてきれいで、機内食も和食などが出て、想像していた以上に快適でした。

シェレメチェボ空港でベラルーシへの入国手続きまで行き、Airbus 321 に乗り換え、国内線扱いで約2時間かけてミンスクに到着しました。日本との時差は6時間です。



森と湖の国・ベラルーシ

ベラルーシは国土の45%が森林に覆われ、1万以上の湖が点在する自然豊かな森と湖の国です。

1991年にソ連から独立し、独裁者と言われているアレクサンドル・ルカシェンコ大統領の下、ロシア寄りの政策がとられてきました。

ベラルーシはヨーロッパとロシアに挟まれた地勢のため、過去に何度も国土を蹂躪された歴史があり、人々は貧しくても平和なソ連時代のような生活を望んでいるようです。

人口は約950万人、広さは約20万平方キロで日本の約半分というところでは。

住民はベラルーシ人が約85%、ロシア人が約8%、宗教は東方正教会が80%で、主な言葉はベラルーシ語とロシア語です。

国民の科学技術の水準は高く、長い冬を過ごす知恵としてITが発達しており、世界各国の企業が開発拠点を置いています。

1986年に原発事故を起こした「チェルノブイリ」はウクライナの北部にあるのですが、風向き関係でベラルーシが大きな被害を受け、土壌汚染や子供たちの遺伝子異常の問題を抱えていると言われています。

ベラルーシは「美人の国」だそうで、テニスの「マリア・シャラポワ」選手もベラルーシの出身だと言えば十分納得できます。

美人に会えるのを楽しみに旅行に出かけましょう。



ミンスク空港から市内への移動の途中、「栄光の丘」の上に「解放記念碑（対独戦争におけるミンスクの解放記念碑）」が見えました。

ミンスクの町はソ連時代のような無味乾燥の四角い建物が並んでいますが、ルカシェンコ大統領肝いりの図書館や新しい商業施設も見受けられます。

もうかなり遅い時間でしたが、まだ明るい中でカジノを備えたスマートなホテルに到着しました。



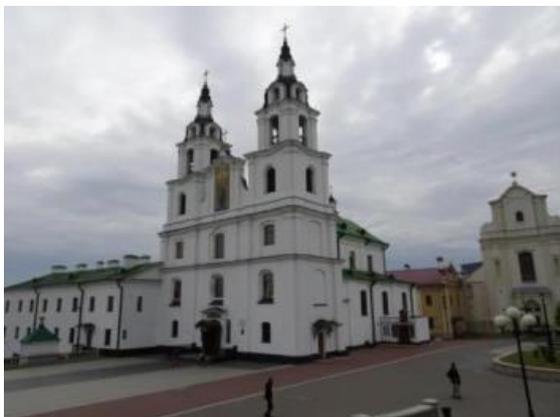
首都ミンスク

ミンスクの朝、最新のホテルとソ連時代を想像させるトロリーバスの対比がいい雰囲気を出しています。



ミンスクの町には東方正教会などたくさんの教会があり、町には多くのモニュメントが飾られており、心豊かにしてくれます。

スヴィスラチ川を見下す丘の上に聖霊大聖堂があり、内部は豪華なイコンが飾られており、敬虔な信者がお祈りをしていました。



町の中央をスヴィスラチ川が流れ、その河岸に戦前の商家を復元した一画、トラエツカヤ旧市街地区があります。ユダヤ人が住んでいた地域についても復元されています。

スヴィスラチ川の河岸にアフガニスタン派遣兵士の慰霊碑があります。

1979年からソ連がアフガニスタン紛争に出兵し、その多くはベラルーシやウクライナなどの連邦国から派遣された兵士だったそうです。



町の中央に国会議事堂があり、その前にロシアの革命家、レーニンの堂々とした姿が見られます。白っぽい建物が多い中、真っ赤なレンガ造りがひととき目立つのが聖シモン・聖エレーナ教会で、この教会の脇にある鐘は、長崎の浦上天主堂から贈られたものだそうです。レーニン像のすぐ傍には大学があり、学生さんたちが緊張の面持ちで試験の開始を待っていました。



第二次世界大戦でのソ連の勝利を記念した高さ 40m のオベリスクがそびえる「勝利広場」。ミンスクの町の道路幅が広いのは滑走路としても使用できるように設計されたという事でした。



世界遺産のミール城・ネスヴィジ城へ

ミンスクから約 100 km、世界遺産に指定されたベラルーシの二つの城、ミール城とネスヴィジ城は度重なる戦禍で被害を受けましたが、1991 年の独立後に修復され、今は博物館として美しい姿を残しています。歴代の城主たちは、領地を治めるだけでなくハンティングやコンサートやダンスパーティなどを楽しんでいました。



「王冠のない王」と言われ財力、権力をも持ち合わせていたラジヴィル家の居城がネスヴィジ城です。ネスヴィジ城は1533年に、当時のリトアニア大公国の最高実力者ラジヴィル家の所領になりました。その後、1939年にソ連の侵攻によってラジヴィル家が追放されるまで改築しながら使用されました。ミール城はラジヴィル家が別荘として使用していたようです。



ブレストへ

ミンスクからブレストまで350kmありますが、標高差10mもないような平坦地と湖沼が連なり、白樺や松（杉？）の森林や麦を中心とした農地が広がっています。この辺りは北緯52度～53度くらいで、北緯46度付近の稚内よりずっと北の位置にあります。

ブレストへの境界にヨーロッパ・バイソンのモニュメントが立っています。

ヨーロッパ・バイソンは野生では一度絶滅しましたが、動物園などに残っていた数頭から、ベラルーシとポーランドの境界にあるベラヴェジの森で保護されて数百頭まで回復しました。



日暮れ時、といっても夜8時頃にポーランド風のホテルに到着し、音楽を聞きながら美味しい食事をしました。



ブレストの町はポーランドとの国境に位置し、人口は約30万人で、主な工業は食品加工、織物、金属加工業で流通の拠点でもあります。

11世紀に町が建設されましたが、1319年にリトアニアに征服されて「ブレスト・リトフスク」と呼ばれました。

ブレスト要塞

ブレストはロシア、ドイツ、ポーランド、ソ連、ドイツに占領され続けました。

第2次世界大戦中の1941年には、ナチス・ドイツ軍の猛攻撃を受け、ソ連兵はわずか500人の劣勢ながら要塞を拠点に1か月も戦い抜き、ミンスクが陥落し、スモレンスクが攻撃を受けている頃も組織的な抵抗を続け、8月に入ってついに全滅しました。

1944年にソ連がドイツ軍から町を奪還し、その後、ソ連邦が解体した後にやっとベラルーシ領になって現在に至っています。

ブレスト要塞の星形の入口を入ると、コツコツと時計の音、次に臨時ニュース、そして戦いに立ち上がれという放送が流れていました。男の人の大きな像の前に来ました。

像の前にきれいな花が飾られていますが、間もなくやって来る独立記念日（7月3日）の準備だそうです。



1941年6月22日朝4時、ナチス軍はポーランド側から侵攻してきました。当時、国境の川の向こうはドイツが支配していたポーランド領でした。

要塞を守っていたのはソ連 KGB の国境守備隊で、家族を含んで4000名がドイツの侵攻を食い止めました。



土地の人達が要塞の中にある教会に日曜礼拝に来ていました。敬虔なる東方正教徒の娘さん達です。



肥沃な穀倉地帯・ウクライナ

ブレスト要塞から南へ少し走るとウクライナとの国境です。

ウクライナは日本の1.6倍の国土をもち、平坦で肥沃な穀倉地帯が広がります。

人口は約4500万人で、ウクライナ人が全人口の約8割を占め、ロシア人が約2割で、宗教は、正教会の一員であるウクライナ正教会です。

10世紀にはヨーロッパ最大の版図を誇ったキエフ大公国の首都キエフが置かれました。

キエフ大公国が13世紀にモンゴル帝国に滅ぼされた後は、ウクライナ・コサックの国家が興亡し、「ヨーロッパの穀倉」地帯として知られ、19世紀以後産業の中心地帯として大きく発展しており、天然資源にも恵まれ、重化学工業が発達しています。

ロシア帝国の支配を受けた後、ソビエト連邦内の構成国となっていました。1991年ソ連崩壊に伴い独立しました。その後、2004年の「オレンジ革命」以来、独自の道を歩み出しました。

ウクライナはヨーロッパ志向が強い国ですが、2014年ヤヌコビッチ政権が崩壊し、経済はスランプ状態です。また、ドネツク地方が独立宣言をし、クリミアがロシアに編入されました。今回の旅行もウクライナ東部の危険な地域は避けています。

心配ばかりしていても始まりません。

ウクライナもベラルーシと世界一を競う「美人の国」だそうです。

そう言えばユーリヤ・ティモシェンコ元首相もすごい美人でしたね。（もっとも彼女はウクライナ民族の出身ではないようですが・・・）



ウクライナ北西部の町クレヴァニ

ベラルーシのブレストから国境を越えると道の舗装が壊れたガタガタ道になりました。

ベラルーシの方が豊かなのかと思いガイドさんに尋ねると、その通りで、一人当たりの GDP はベラルーシ・ウクライナ・モルドバの順でした。

ウクライナでは若者の失業率が高く、国外に出てしまったり、年金も大幅にカットされているそうです。

途中でバスのオイルが漏れたので、今までワイシャツ姿で運転していた運転手さんが作業服に着替えてオイルホースの交換をしてくれました。

修理作業中にガソリンスタンドにソ連製のクラシックカーに乗った若者が来たので、1枚写真を撮らせてもらいました。



約260km走ってウクライナ北西部のクレヴァニへ到着し、「愛のトンネル」を観光しました。

2014年、今関あきよし監督が撮った映画「クレヴァニ、愛のトンネル」の舞台にもなりました。

約3kmにわたり、鬱蒼とした植物に覆われた緑のトンネルで、ここをカップルで歩くと必ず恋が成就するという人気のスポットだそうです。



リヴネ

クレヴァニの近く、リヴネのホテルに宿泊しましたが、日曜日の夜でもあり、多くの若者が語り合っていました。

ホテルの前にはウーラスというリヴネ出身の作家の彫刻がありました。



クレヴァニの近く、リヴネのホテルに宿泊して翌朝、約5時間、約330km走って首都キエフに移動しました。

首都キエフ

いよいよ「キエフの大きな門」とご対面です。

ムゾルグスキーの友人、ハルトマンは1869年に破壊されていた「キエフの門」の再建コンペに応募したのですが、キエフの門の再建計画は実施されないまま終わり、ハルトマンは亡くなりました。

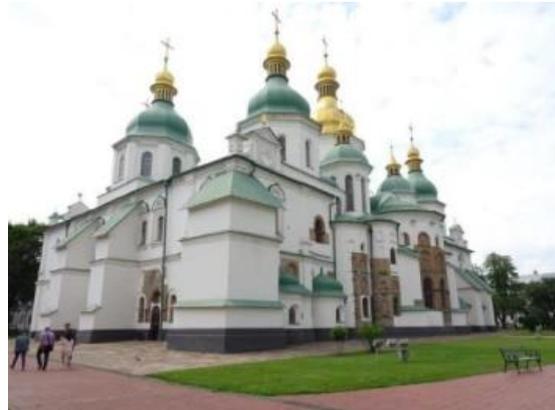
そしてハルトマンの友人であったムゾルグスキーが亡き友人を追悼するために作曲したのが、「キエフの大きな門」だそうです。ムゾルグスキーはピアノ曲として作曲しましたが、後にラヴェルがオーケストラ曲に編曲し、あのトランペットのプロムナードになったのですね。

「黄金の門」は1982年に復元され、新しい建物は、元の門の遺跡をカプセルのように覆い隠すように建てられています。

「黄金の門」から真っ直ぐ進むと「ソフィア大聖堂」に至ります。

ウクライナは988年、ウラジミール大公が東方正教会を国教にし、聖ソフィア寺院はヤロスラフ公が1037年に建設した現存するキエフ最古の教会です。

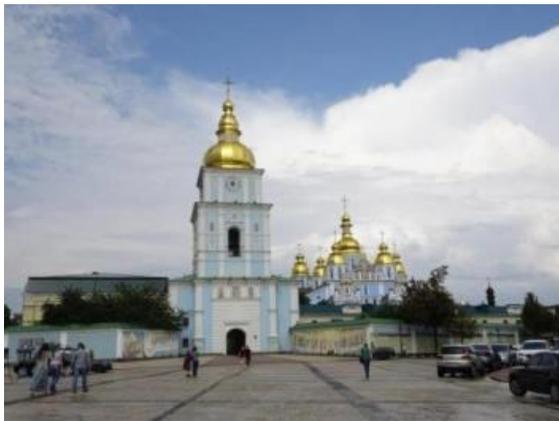
「オラント（折り）」と呼ばれる聖母マリアのモザイクが飾られていました。



ソフィア大聖堂の前のソフィア広場がキエフの中心地になっており、その近くに、昔、ゲシュタポの刑務所だった建物があり、今は政府の機関になっています。



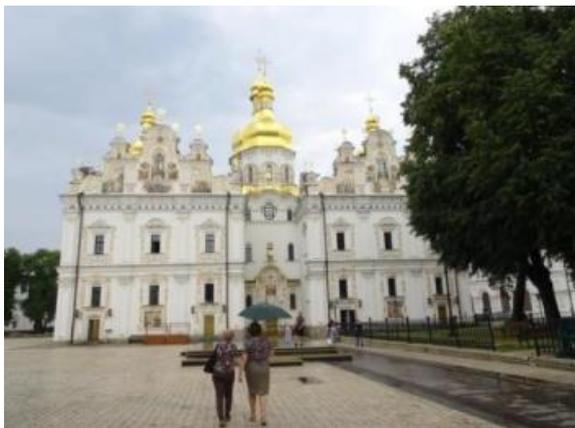
聖ミハイル教会は黄金のドームの美しさで知られていましたが、1936年スターリンによって破壊され、1991年のウクライナ独立後に経済が困難をきわめている中でようやく修道院として再建されたそうです。



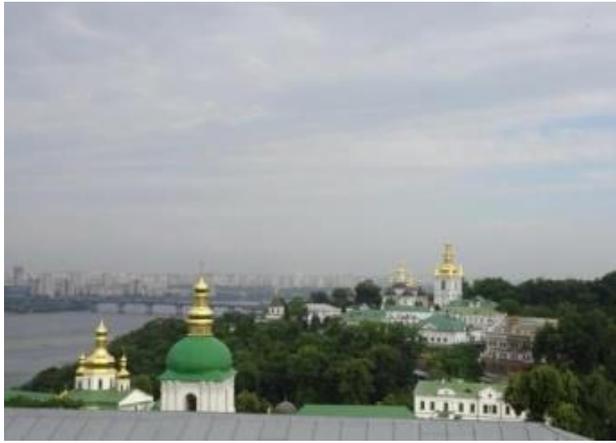
次に、東スラヴで最も長い歴史を持つペチェルスカヤ修道院を見学しました。

ペチェルスカヤ修道院はソ連時代には「歴史記念碑的建築群」として博物館になっていましたが、1988年には正式に宗教活動を再開し、現在はロシア正教ウクライナ支部の総本山になっています。

修道院では聖書の翻訳や歴史書の編纂、イコンやモザイクの制作などが行われています。



ペチェルスカヤ修道院からキエフの町を見るとドニエプル川沿いにキエフの町が広がっています。



オデッサへ

キエフ・ボリスピリ空港から、空路国内線でオデッサへ。

キエフの町の中のサッカー場等の建物を横目で見て郊外に向いますが、この郊外地区の人口増加がすごく100万人もの人が新たに生活の場になっているという事でした。

赤い丸いビルは、アフガン帰還兵士の住宅だそうで、ここでもウクライナと共に、ソ連邦の周辺国からの派兵が行われていたことが判ります。

キエフのボリスピリ空港からウクライナ・インターナショナル・航空の Embraer 190 でオデッサに向います。



「黒海の真珠」オデッサ

オデッサは「黒海の真珠」と呼ばれる黒海に面した港湾都市で、様々な国の支配を受けてきたため、国際色豊かな都市となりました。

ここが「ポチョムキンの階段」です。

「戦艦ポチョムキン」の水兵姿のアザラシくんとディアナちゃんがパフォーマンスをしていました。

歴史地区では、ドイツ人の大金持ちの家や恋人たちが愛を誓い合うという愛の橋を見ました。

オデッサは黒海沿いの大金持ちの別荘地という感じです。



ワインの国・モルドバ

モルドバ共和国は国土の広さは九州よりやや狭いくらいで、人口は約350万人。

民族はモルドバ・ルーマニア人が約65%、ウクライナ人14%、ロシア人13%、宗教は正教が98%です。モルドバはワインの産地としても知られ、あちこちに葡萄畑が広がっています。

モルドバ経済はソ連時代にはワイン生産の単一経済を担当し、資源・エネルギーを他の共和国に依存していたため、ソ連の崩壊によって壊滅的な打撃を受けました。

経済はその後も一進一退の状態が続き、モルドバは現在でもヨーロッパの最貧国と言われています。

若者の貧困に対する不満から「ツイッター革命」が起こり、2009年から3年間も大統領が不在だったそうです。

若者の失業率が50%くらいあり、外国に出稼ぎに行く人も多いそうです。



沿ドニエストル・モルドバ共和国

オデッサから約110km、モルドバ共和国に入国して、間もなく沿ドニエストル共和国の検問所で入城審査を受けました。

沿ドニエストル・モルドバ共和国は、1990年にソ連から独立する際、ロシア系住民が「沿ドニエストル共和国」として独立を宣言してモルドバ政府と戦争になりました。

国際的にはモルドバ共和国の一部とみなされていますが、民族としてはロシア系が約30%で、独立戦争当時、ロシアが応援に駆けつけて以来、警察・軍隊はロシア軍が担当しています。

ティラスポリの中央部で「ガガーリン」に出会いました。

ソ連邦の英雄は沿ドニエストル・モルドバ共和国とは直接関係はありませんが、今でもロシア民族の誇りなのでしょうね。

そして、堂々としたレーニン像と市役所。

人口20万人にも足りない自治共和国が頑張っている理由は、発達した工業地帯と豊かな農地を持っているからなのです。



この国唯一の Sheriff 財閥はロシア系で石油やガスで儲けたようで、サッカー場・スーパーなどを展開しています。



モルドバの首都キシナウ

ティラスポリでの観光後、1時間半ほど走って、夕方、モルドバの首都キシナウへ到着しました。

中央広場の「勝利の門」は1840年の露土戦争で勝利したのを記念する凱旋門で、後方は市役所です。



シュテファン・チェル・マレ公園の正面にはモルドヴァ公国を建国したシュテファン大公の像があります。この公園内には若い頃、この地で暮らした作家プーシキンの像もありました。



ミレスチ・ミーチワイナリー

世界最古のワイン生産地域の一つと言われているモルドバ共和国は紀元前3000年頃にはワインの生産が始まりました。

葡萄づくりに最適の温暖な気候と、粘土質を含んだ個性的な土壌が葡萄の生産に適しているそうです。

ミレスチ・ミーチ社は16世紀に会社が設立されて以来、有機農法によるワイン製法を厳守しており、王公貴族専用のワインは櫛樽で自然発酵を待ち、熟成するまで寝かせ、出来上がったワインを瓶詰し、さらに数年～数十年寝かせるそうです。

地下貯蔵庫は、地下30m～80mにあり、「150万本のビンテージワイン」と「貯蔵所の総距離200km」が、2005年ギネスブックに登録されました。

巨大なワイン貯蔵所を見学した後、音楽の生演奏を聞きながら、地下貯蔵所でのワインを試飲して昼食を楽しみました。



オルヘイ・ベッキ

食後1時間半をかけてオルヘイ・ベッキへ移動し、旧オルヘイの洞窟修道院を観光しました。

ここでは10世紀頃から修道士が断崖絶壁に洞穴を掘って、祈りの場としていました。

ソ連時代には閉鎖されましたが、近年、再び修道士が戻り、隠居生活を送りながら祈りを捧げています。



麓のブイチェニ村（人口300人）を散歩していると、枝もたわわにチェリー、アプリコット、クルミ、桑の実などが実っていました。

モルドバのクルミの輸出量はフランスに次いで世界で2位だそうです。



トレブジェニ村

隣村のトレブジェニ村で夕食をとり、食後、村の子供達による「花いちもんめ」のような歌と踊りを楽しみ、若者たちとも交流しました。

モルドバはヨーロッパで最貧国という事でしたが、とても豊かに見えました。

旅の終わりに

キシナウを出発してモルドバ国際空港からアエロフロートロシア航空 Airbus A320 で、モスクワ・シェレメチェボ空港へ、そして Airbus330-300 に乗り継いで帰国の途につきました。

一抹の不安を抱いて出発しましたが、念願の「キエフの大きな門」に直面することができ、また、平和なベラルーシ・ウクライナ・モルドバで多くの美人に出会い、美味しいワインを飲めた素晴らしい旅行でした。